高等教育研究センター
かわらばん
春号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第26号

未来のためにできること

高等教育研究センター長　木俣　元一

本年1月1日に高等教育研究センター長に就任しました。

教育は、みなさんもご経験があると思いますが、とても微妙でとらえどころがなく、多くのことがらを盛り込めばそれだけ効果があがるというわけでもありません。かといって、ほったらかしにしておけばいいというわけでもありません。また、その結果は即座に求めることはできない代わりに、数年から数十年、あるいはもっと先という遠い未来にまで及びます。そのため、とても怖いところがあります。わたしたちが今ここにいられるのも、先人たちが将来へ向けてさまざまな投資をしてくれていたからにほかなりません。

さいきん気になっているのは、社会全体、さらには大学においてさえも、皆で人を育てようとするゆとりをなくしているように感じられるところです。教育に関わる対価は受益者が負担すべきであるというような空気が広まってしまっているようです。わたし自身、大学生だった頃はたいへん生活が苦しかったので、現在のような授業料では大学を卒業することもできなかったかもしれません。私の周りでも、いろいろな事情から学業をあきらめなければならない学生がおり、とても複雑な思いです。

その一方で、今、さまざまな変革やグローバル化が大学教育に求められています。これまで大学で培ってきた教育のよいところをできる限り残しながら、長期にわたるヴィジョンを持って、こうした変化を導き入れるという難事をなしとげるためには、さまざまな人たちの知恵を結集する必要があります。今こそ、大学教育の現実そして未来を見据えた適切な判断が大きな価値を持ってくるといえるでしょう。こうした状況ゆえに、わたしたちのセンターも重い責務を担っていると認識しています。

わたしの専門は西洋中世美術史というマイナーな分野です。これは過去の美術のあり方について歴史的に研究するもので、センターで進められている高等教育の研究とは直接には関係ありませんが、いろいろなつながりはあるととらえています。実際には、高等教育に関する研究成果を現場での教育活動に還元できるような提案をすることがこのセンターの柱のひとつですから、センターにおける研究活動と名古屋大学における教育活動の橋渡しをすることができたらいいのではと考えています。こうした結び目になってくれる先生方が学内の多様な分野にいてくださるというのが理想です。

このような教育活動に関する提案ができるのも、センターに所属する教員や研究員たちが行っている地道な基礎的研究の積み重ねがその基盤となっているからです。こうした基礎的な研究の部分はなかなか社会的に価値が認められにくく、その成果を応用や提言に活かすことも容易ではありませんが、このような研究成果こそが学術の本質的な源泉となっていることはたしかで、これを守り育てていくこともセンターの重要な課題です。この意味で、名古屋大学というこの上ない素材が間近にあることは、とても恵まれていることだと思います。

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit

科学コミュニケーションを始めたい研究者のためのオンライン実践ガイドブックを公開しました。皆さんのご意見をもとに、より良いものに改善していきたいと考えています。まずは、ウェブサイトにアクセスしてみてください。

URL　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/scicomkit/

有志によるFD・SDの取り組みを応援しています

FD・SD コンソーシアム名古屋では、本学教職員有志による業務改善やスキル向上の活動を後援しています。昨年度は、名古屋経済学教育研究会、なごや科学リテラシーフォーラム、名古屋 SD 研究会、名古屋哲学教育研究会などが発足し、セミナーの開催やハンドブックの作成といった取り組みがコンソーシアム支援のもとで行われました。コンソーシアム事業ですので、中京大学、南山大学、名城大学の教職員との共同企画も可能となっています。

コンソーシアムでは、今年度の後援事業を随時受付けています。あたためている企画がお有りの方は、この機会にぜひ、info@cshe.nagoya-u.ac.jp（担当：久保田）までご連絡ください。

2008年度名古屋大学学生論文コンテスト 審査結果発表!

2008 年度名古屋大学学生論文コンテストには、現代の社会問題をテーマとする論文募集に 15 点の応募がありました。応募数は少ないながらも、抽象的な問題から身近な問題まで、また、先行文献を数多く読みこなしたものからオリジナリティのある結論を導いたものまで、多様な論文が集まりました。学内教員による厳正な審査により、下記 3 点が入選に決まりました。入選論文は、名古屋大学学術機関リポジトリに掲載されています。

学生論文コンテストは第 2 回の開催でしたが、論文の質が全体に向上していたことは嬉しい結果でした。今年度も引き続き、学部学生が積極的に論文執筆に取り組める仕掛けを作っていきたいと考えています。

優秀賞（附属図書館長賞）
「レポートの丸写しと大学生の意識」
経済学部 1 年　奥田 ゆかり

優秀賞（三省堂名古屋テルミナ店賞）
「多文化主義をめぐる公共性の問題に関する一考察」
文学部人文学科 3 年　王 昊凡

優秀賞
「9・11 以後のアメリカ外交と安全保障に関する一考察」
医学部医学科 1 年　山田 悠至

『経済学英語ハンドブック―授業で使える例文集』を刊行しました 名古屋経済学教育研究会

このたび名古屋経済学教育研究会では、経済学を英語で教える際に必須となる専門用語とそれを用いた基本例文のハンドブックを制作しました。この研究会は名古屋地域の経済学の教員による有志の研究会（代表：多和田眞・本学経済学研究科教授）で、FD・SD コンソーシアム名古屋の後援を受けて 2008 年に立ち上げたものです。このハンドブックでは、ミクロ経済学の基本用語（英語）30 点を選定し、これらを用いた 90 の例文をさまざまな経済学テキストの中から抽出しました。教員が英語で経済学を教える際に、あるいは大学院生が経済英語を学ぶ際や外国人留学生が日本語で経済学を学ぶ際などにご活用頂ければ幸いです。本ハンドブックをご希望の方は、高等教育研究センター（電子メール：info@cshe.nagoya-u.ac.jp）までご連絡ください。

（近田政博）

「大学教育改革フォーラムin東海2009」を開催

FD・SDコンソーシアム名古屋では、3月7日、「大学教育改革フォーラムin東海2009」を開催しました（会場は名大東山キャンパスIB電子情報館）。このフォーラムは東海地域の大学関係者による草の根交流を目的とするものです。当日は南山学園理事長のハンス ユーゲン・マルクス氏による基調講演で始まり、「大学認証評価への対応」、「学習意欲を高める授業上の創意工夫」、「高校は大学をどう見ているか」、「FD・SDのノウハウをどう共有するか」など4つのセッションが設けられました。この他、現代の大学生や留学生の悩みに関するミニレクチャー、パネルディスカッション「授業時間外の学習をどう支援するか」、大学教育改革に関する23件のポスターセッションなどが行われ、好評を博しました。

近年は全国至る地域で大学教育に関するシンポジウムや研究集会が行われていますが、本フォーラムでは、①ふだんは接点の少ない教員と職員が一緒になって意見交換できるようなプログラム上の工夫をすること、②大学関係者と高等学校の関係者が接する機会を提供すること、③ポスターセッションを設けることにより、研究発表に限らず、大学教育に関するさまざまな実践取り組みを紹介する機会を提供すること、などを重視しています。第4回目の今年は過去最大の188名の参加がありました。来年も3月に開催予定です。

（近田政博）

名古屋大学と南山大学の教員で、英語による授業を受講する学生のためのノウハウと英語表現をまとめました。『大学生のための教室英語表現300』（アルク）という冊子です。英語による授業や留学に興味があるけど不安もある、そんな学生の背中をちょっと押してあげたいという思いからつくりました。

Higher Education Glossary
高等教育にまつわる用語集

サイエンスショップ
Science Shop

地域住民や非政府組織が持ちこむ問題や要望に応えて、研究者が調査や開発を行い、その成果をサービスとして提供する。このような活動、またはその運営組織を、サイエンスショップと言います。1970年前後のオランダの学生運動において、大学所有のリソースを広く市民に開放しようとした試みをルーツとしており、近年では学術機関による社会貢献のひとつの形として注目されています。

ショップといっても商業性はなく、大学や市民団体による非営利の活動です。大学教職員と学生の協同運営や、学生の正課教育の一環としている事例もあります。また、サイエンスと銘打ってはいますが、自然科学や工学、医学などに限らず、人文学、社会科学も含まれています。

サイエンスショップは現在、ヨーロッパ、アジア、北米などで実施されています。米国ではルーツを異にするCommunity-based Researchが1960年代から続いており、近年はサイエンスショップの国際ネットワークと連携するようになりました。日本では、原子力資料情報室や科学と社会を考える土曜講座といった市民団体による活動が以前からありましたが、大学としての取り組みはごく最近になって熊本大学、大阪大学、神戸大学などで始まったところです。

サイエンスショップ成功の鍵は、クライアントの積極的な関与にあると言われます。問題の本質を明らかにする、解決へのプロセスをモニターする、提供されたサービスを評価する。さらに、実際に研究活動に加わったり、提供されたサービスを活用・維持するための訓練を受けたりもします。こういった訓練も、サイエンスショップが提供するサービスに含まれるのです。ここに、教育と研究を司る大学がサイエンスショップの主要アクターと目される所以があると言えるでしょう。

（齋藤芳子）

※本稿は「研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit」をもとに構成しました。

読んでおきたいこの1冊
Great Books on University

ケン・ベイン著　高橋靖直訳

『ベストプロフェッサー』

玉川大学出版部　2008年

大学教育の研究と実践で盛名高いケン・ベインによる本書は、2004年の出版以来アメリカの高等教育関係図書のベストセラーの一つである。日本でも大学教育研究者の間で話題になっていた書であり、すでに8カ国で翻訳されている。

性格の異なる全米24大学で優れた教育実践を行っている約60名の教師を対象とする調査を通じて、彼らが授業についていかに考え実践しているのか、学生と自分をいかに扱っているかを明らかにしている。

たとえば、専門分野の同僚と広範な大学コミュニティの両方から、賞賛と尊敬を得られるようなやり方で学生の学習を支援している。とくに学生の学習支援という点では、教員による一方的な知識の伝達やその効率的な吸収を求めるのではなく、より「深い学習」（deep learning）へと学生を誘う。この深い学習とは、多様なものの見方や思考力を養い、自分の力で考えを理解し、出会った概念や情報を論理的に説明し、学んだ内容を広く活用し、学んだことをこれまでの経験と学修に関連づけるように支援するものである。そのために、優れた教員は、学生に自信をもたせ、挑戦する意欲と達成感をもてるような学習課題と目標を注意深く設定するという。

すぐれた教員に共通する原理として、7点をあげている。①自然で批判的な学習環境を準備する、②学生の授業外での学習を援助する、③学生を学問的に思考させる、④多様な学習経験を創り出すなど、示唆に富むものばかりである。学生自身に話させることをあげている点も興味深い。

名大教養教育院では今年度から優秀教員を顕彰することになった。本書は、優れた授業とはなにかを考えるうえで得るところの多い書といえる。

（夏目達也）

高等教育研究センタースタッフ（2009年4月現在）

センター長　木俣元一
専門領域：西洋中世美術史
教授　夏目達也
専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授　近田政博
専門領域：比較高等教育学、学習支援
准教授　中井俊樹
専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント
助教　齋藤芳子
専門領域：科学技術社会論
研究員　久保田祐歌
研究員　安田淳一郎

＜平成21年度　海外客員＞
サイード・ペヴァンディ　（パリ第8大学）
孫　準鐘　（韓国教員大学）

＜平成21年度　国内客員＞
荒井克弘　（東北大学）
小林信一　（筑波大学）
大場　淳　（広島大学）

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail　info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/

『かわらばん』名古屋大学高等教育研究センター　ニューズレター春号（第26号）2009年4月発行
編集長　木俣 元一　編集幹事　齋藤 芳子